

排尿の難治療 地元で

富山労災病院

コロナ機

北陸3県拠点に

富山労災病院(魚津市六郎丸)は、治療に手術が必要な難治性排尿障害の患者を受け入れるなど診療に力を入れている。北陸3県では従来、都市圏の病院に患者を移して手術を受けてもらうケースが多かったが、新型コロナウイルス禍の移動制限により治療拠点の地域偏在が浮き彫りとなったためだ。県内唯一の日本排尿機能学会認定医を中心に、地方でも完治を目指す体制づくりを進めており、関係者は「地方の病院が機能を補完し合うモデルケースにしたい」と話している。

(石川雅浩)

排尿障害は尿失禁や頻尿などの症状を指し、治療ではまず薬物療法が用いられる。効果がなければ「難治性」として、難易度の高い手術を行う場合がある。ただ、その病因は過活動ぼつこう、腹圧性尿失禁、尿道狭窄症、前立腺肥大症などさまさま。診断が難しいだけでなく検査にも時間を要するため、がんや急性期疾患に追われる県立病院や大学病院などの高次機能医療機関では限られた診療しか受けられないのが実情だ。

富山労災病院の泌尿器科は常勤医3人。日本排尿機能学会認定医で、30年にわたって排尿障害に関わる石浦嘉之医師(57)を中心に「排尿障害専門外来」を設けてきた。ただ、コロナ禍前までは基本的に、北陸の他の医療機関から患者を受け入れることは少なかった。

同病院によると、これまで北陸では同病院に限らず、手術となれば大都市圏の医療機関に患者を紹介する風潮があった。手術が必要な男性の重症尿失禁の治療で最も採用される人工尿道括約筋手術は、2013〜15年に全国で541件だったのに対し、北陸3県ではゼロだったという。

富山労災病院は県内で唯一、排尿障害の一因となる前立腺肥大症の手術で「グリーンライトXPS」と呼ばれる特殊な装置を用いた光選択的前立腺レーザー蒸

最新レーザー手術導入

散術(PVP)を実施している。出血が少なく、体への負担が小さいのが特徴。抗血栓の投薬を受け、血が固まりにくくなっているため大量出血が懸念される人

も治療できる。前立腺は男性の尿道を包むように存在するクルミ大の生殖器。程度の差はあっても80歳までに8割が肥大型になるとされ、頻尿や残

の間で学会報告や個別相談も重ね、現在は3県の県立

病院や大学病院、開業医など20施設以上の医療機関から紹介患者を受け入れるようになった。排尿障害は泌尿器科だけでなく、他の診療科での診察で見つかるケースもある。

石浦医師は今後、他の診療科への周知や、地域住民への浸透が重要になるとし「中小病院が、地方完結型の診療に取り組んでいるのを理解してほしい」と話している。

尿感、尿勢低下などの症状が出る。電気メスを尿道から入れて患部を削る術式が一般的だが、グリーンライトXPSによるPVPは尿道から挿入したレーザーで肥大組織を蒸散させる。

手術は1〜2時間と短く、尿道カテーテルも術後1〜2日に外すことができる。入院期間は従来の約1週間から5日程度に短縮した。2021年7月の導入以降、69〜89歳の43人がこの手術を受けたという。



難治性排尿障害の診療体制について説明する石浦医師—富山労災病院

そこで富山労災病院は排尿障害専門外来での患者受け入れをスタート。いずれも難易度が高いとされる過活動ぼつこうのボトックス注入手術、女性腹圧性尿失禁の尿道スリング手術、尿道狭窄症の尿道形成術などで県内最多の実績を誇る。北陸地方の泌尿器科医と

2023年12月17日 日曜日 北日本新聞朝刊